こんな魔王と勇者ってどうですか？

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こんな魔王と勇者ってどうですか？

【Ｎコード】
Ｎ２６９９Ｘ

【作者名】
ケセランパセラン

【あらすじ】
俺、佐藤勇治（さとうゆうじ）は平和な田舎町で暮らしていた平凡な高校生だった。けどあることがきっかけで異世界に飛ばされてしまいいきなり勇者になってしまった。そこで魔王退治を依頼される。しかたなくその依頼を受けて魔王退治に向かうがその魔王がかなりの変わり者だったんです。

俺、異世界に来ちゃいました（前書き）

はじめまして。ケセランパセランと申します。ファンタジーが書いてみたくて書いてみましたが！絶対グダグダになってきますのでそれどもいいよという方はよろしくお願いします。！

俺、異世界に来ちゃいました

ここは日本のとある田舎町。あるものは見渡す限りの畑と田んぼ。町の周りも山に囲まれており自然があふれているとても空気のおいしい場所だ。これだけ聞けばとてもいい場所のように思うだろう。しかしさっきも言ったとおりここにあるのは見渡す限りの畑と田んぼそして山。そんな環境に俺は最近不満を感じるようになっていた。

「本当なんにもねぇよなここって」

そんな独り言を言いながら俺「佐藤　勇治」（さとう　ゆうじ）は高校の図書室でただいま居残り作業中。

「はぁ～あ、ついてねぇよな～」

よりにもよって一番怖いと評判の教師の授業で居眠りしてしまうなんて。おかげで図書室の書庫の整理なんてやりたくもない仕事を任されてしまった。

「にしてもいったいいつになったら終わるんだこれ」

俺の目の前には気の遠くなる程の本の山。その中にはいつの時代の本だよと思うようなものもいくつか混ざっている。っていうかうちの高校の図書室ってこんなに本があったのか。普段来たことがないから全然知らなかった。

けれどもここそんなに利用者がいないのか先ほどから人っ子一人来ない。本読みに来る人がいないのにこれだけ本あってもあんまり意味がない気がするが。

そんなこと考えつつしばらく作業していると

「ん？・・・なんだこの本？」

たくさんある本の山の中でそれはひときわ怪しい異臭を放っていた。他の本と比べて見た目がかなりごつくこの本で思いっきり殴られれば死ぬんじゃないかと思うほど分厚い。表紙にはどこの国の文字か分からないがひたすら一面になにか書いてある。なんていうかよくファンタジー映画なんかにでてくる冒険の書みたいな感じの本だっ

た。
「うわぁー何かこれハリー○ッターとかにでてきそうだな」
ちょっと興味を持ったので読んでみようと思い表紙をめくろうとしてみたが
「うぉっ！！なんだこれ重っ！！」
すごく重いぞこの表紙。表紙なのにこの重さって読ませる気ないだろ。
「ぐぬぬぬぬぬ・・・こんぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
表紙をめくろうと格闘すること数分。なんとかめくることに成功したがかなり疲れた。
「ぜぇはぁぜぇはぁ・・・い、一体何の本なんだ？」
息をきらしながら本を見てみると
「なんだこれ？なんて書いてあるんだ？」
ページ一面にまたもやどこの国のものか分からない文字がびっしり書かれている。それとどこかで見たことがあるようなこれは魔法陣っていうのか？が書かれていた。
「これ何なんだろう？」
俺はその魔法陣？のようなものに手を触れてみた。その時だった
「あれ？なんか急に眠くなってきた・・・」
頭がクラクラする。なんだか体も軽くなってきた気がする。
「あ～・・どうなっ・・てん・・・ｚｚｚｚ」
俺はそのまま本の上に突っ伏すような感じで倒れこんだ。なにやら本が一瞬光っていたような気もするがそんなこと考える前に俺の意識は完全にブラックアウトしていった。
それからどれくらいたったのだろうか。
「・・・・さま。」
ん？なんだ？なんだか体がゆさゆさと揺さぶられているような感覚が急に襲ってきた。
「・・・者様」
それに誰かの声も聞こえてきた。誰だ？せっかく人が気持ちよく寝

てたのに。
「う・・・ん」
闇の中に消えていってた意識が次第に戻ってきた。俺はゆっくりと目を開けて上半身だけを起き上がらせる。
あ～～まだ起きたばかりなので頭がボ～～ッとする。しばらくその体勢のまま下を向いていた。すると次第に頭がスッキリしてきた。
「どれくらい寝ちまってたんだろ俺」
よっと立ち上がって周りを見回す。そこで俺は違和感を感じた。
「あれ？」
図書室ってこんなに広かったっけ？天井とか見上げるくらい高かったっけ？こんなに綺麗な絨毯とか敷いてあったっけ？
「寝ぼけてるのか？」
そう思って目をゴシゴシとこする。ついでにほっぺたもつねってみた。痛い。どうやら夢ではないらしい。意識もはっきりしているし見間違えることはないだろう。
「ど、どうなってんだ一体」
何が起きたのかさっぱり分からない。ここはどこだ？そんなこと考えてたら
「勇者様！！お目覚めになられましたか！」
「ぬお！！」
急に後ろから声をかけられた。振り返るとそこにはマンガとかでよく見るようなお姫様みたいなカッコウをした女の子が立っていた。
「も、申し訳ありません。驚かすつもりはなかったのですが」
「あ、あぁ～いえ大丈夫です。はい。」
え～と、誰だこの子。
「けれど、本当に勇者様が来てくださるとは。やはりこの書に書いてあることは本当だったのでございますね」
ん？ちょっと待て。この女の子今なんて言った。確か勇者？とか言ってなかったか。
「あ、あの～すいません。さっきから言ってるその勇者ってなんで

すか？あとここはどこなんでしょうか？」
「ここですか？ここはセシリエル王国でございます。そして私がこの国を救ってくださる勇者様をお呼び出しする儀式を行ったところあなた様がこの国に呼び出されたのです。つまりあなたがこの国の救世主である勇者様ということなのです！！」
・・・なるほどつまり俺はこのなんたら王国を救う勇者様としてこの国に呼び出されたというわけか。
あるあ（ｒｙねーーーーーーーーーーーーよ！！！
「はあああああああああああああああああああああああああ！！！！」
こうして俺の勇者様としての生活が始まったのである。
「え！？始まっちゃうの！！ちょっと～～～～～～～！！！！」

一般人が魔王を倒すとか無理だと思うんだ（前書き）

お、お久しぶりで・・・ぐはっっ！！

というわけで久しぶりに更新です。よろしくおねがいし・・バタッ。

一般人が魔王を倒すとか無理だと思うんだ

えーと、待ってくれ。もう何から突っ込んだらいいのやら。図書室で書庫の整理をしていた俺がいきなりわけのわからない場所に来て目が覚めたら見知らぬ女の子に，勇者様！！，なんて呼ばれたりして一体どうなってるんだ。

「ちょ、ちょっと待って、待ってください。何なんですか救世主？この国を救う？何のことですか！？」

「ですからあなた様はこの書物によってこの国に召喚された勇者でありこの国の救世主なのです！」

あ～だめだ全然話にならん。どうするかなぁ・・。ふと彼女の手元を見てみると俺が書庫の整理をしているときに見つけたあの怪しい本を持っていた。これがさっきから言ってる俺をここに呼び出した？書物ってやつか。あれ？でもその本かなり分厚くて重いはずなのだけどこの子は何でこんなに軽々と持ってるんだ？

そんなこと考えていると

「勇者様、とにかくすぐに魔王退治の準備をいたしましょう」

「へ？魔王・・何だって？」魔王？何それおいしいの？

「さぁこちらです！」

そう言っていきなり手を握られた。女の子に手を握られたの生まれて始めてかも。

「あ、あのちょっと待っ・・ぬあああああああああああああああ！！」

え！？何この子すごい力なんですけど！！やばいよ俺の体が宙に浮いちゃってるもん！！

「タンマ！！タンマーーーーーーー！！きぃいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

しばらくの間長い廊下をこの状態で過ごした俺は目的地につく頃には口から魂が出たような状態になっていた。

「さぁ着きましたよ勇者様」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「あれ？勇者様？きゃあああああ！！勇者様ーーー！！」
しばらくして
「・・・・はっ！！！」
俺は何とか意識を取り戻した。
「勇者様！よかったですーー。ごめんなさい私慌ててて・・本当にごめんなさい・・」
女の子は泣きそうになりながらペコペコしてきた。
「い、いやまぁ大丈夫だから。そんな泣きそうな顔しないで、ね？」
実際全然大丈夫じゃなかったけどね。生まれて初めて本気で死ぬかと思った・・
「ぐすっ・・本当にごめんなさい。勇者様はお優しいんですね」
「い、いやぁそんな優しいなんてことは・・・」
またもや生まれて初めて女の子に優しいなんて言われてしまった。
正面から言われるとすんげぇ恥ずかしいな。
と、ここで俺はあることに気ずいた。
「そういや君名前は何て言うの？」
「あ！も、申し訳ございません！私の名前はカトレア・ヒューブリックと申します」
カトレア・ヒューブリック？何かすごい名前だな。やっぱりここ日本じゃないのかなぁ。
「カトレア・ヒューブリックさんね。俺の名前は佐藤勇治っていいます」
とりあえず俺も軽い自己紹介をする。
「佐藤勇治様・・それが勇者様の本名なのですね。しっかりと覚えておきます！」
「あ、あぁありがとう。それよりもカトレアさんいったいここって・・」
俺の目の前には所々に綺麗な装飾が施されている金色の扉があった。

こういうのよく分からない俺でも見入ってしまうほどの壮大さだった。
「ここにはわが国が魔王を倒すために開発した様々な武器が保管してあります。今から勇者様には魔王討伐のための武器選びをしていただきます。」
まただ。さっきから魔王だの討伐だのすごい話をしているが俺には何のことだかさっぱり分からない。
「ま、待って俺が魔王を討伐？それってその魔王とやらと戦えってことだよね？」
「はい、そのとうりでございます」
「いや、あの俺ケンカもしたことないし力だってそんなにないから戦うとかそういうのは無理だと思うんだよね」
「いえ、勇者様ならきっと大丈夫です！この書にも召喚された勇者が必ずやわが国を救ってくれると書いてありますしそれにこの武器庫の中にある武器を使って挑めば問題はないはずですから！」
いや色々と問題だらけだよ！！何なのその自信は！本人が無理だって言ってるのに！
「とにかく見ていただければ大丈夫だと思えるはずですから！行きましょう勇者様」
とりあえずここで魔王討伐の武器とやらを選ぶことになったのだが
「選ぶだけ無駄だと思うけどなぁ・・」
こうして俺の武器選びが始まった。

初期装備って意外と大事（前書き）

ファンタジーって書くの難しいですねぇ～・・・

初期装備って意外と大事

カトレアさんに案内されて武器庫の中に入ってみる。するとそこには部屋の中にはおびただしい数の剣やら鎧やら俺がいた田舎町ではまず見ないであろうものがところせましと飾られていた。入り口から眺めただけでは奥のほうに何があるか分からないほど部屋もかなり広い。

「な、なんじゃこりゃ・・・」

「すげぇ～どんだけ武器の種類あるんだよ。ってかこの中から選ぶの？」

「はい。魔王討伐のためにはこれくらいしないといけませんから」

気合入ってんなー。ここまでしないといけないくらいすごい魔王って一体どんなんだろう？

「・・・・・・・・・・」

あ、だめだ想像しただけで俺の中の危険を知らせるアラームが大音量で鳴り響いてる。

「さぁ勇者様お好きな武器を選んでください」

「は、はぁ～」

お好きな武器を選んでくださいと言われましてもどうすればいいんだよ。こんなの使ったことも無いのに。とりあえず部屋全体を見るために奥の方えと進んでいく。途中どうやって使うかも分からないような武器がたくさんあったのでカトレアさんに説明をしてもらったがどれもこれも俺が使いこなせそうなものではなかった。

というか本音を言えば武器なんか使いたくなかった。俺は平和主義派なので魔王と戦うなんてもってのほかだし。話し合いとかで何とかならんもんかなぁー。

そんなこと考えながらしばらく部屋の中を見てまわったがどれもこれもしっくりくるものが無かった。

「勇者様お気に召したものはありましたか？」

「うーーん・・もう少し見てまわってもいいかな？」
「ええ好きなだけ見てください。あ、ちなみに私のおすすめはこの龍殺しの剣かこちらの１０ｔハンマーでございますわ」
ぜっっっっっっったい嫌だ！！！！なにそれ！どちらもありえないほどの禍々しいオーラがにじみ出てるんですけど！！
「遠慮しとくよ・・ははは・・・」
まずいぞこれは早くいい感じの武器を見つけないととんでもないやつを使う羽目になるかもしれん。それだけは絶対に避けなければ。
そしてまたしばらく部屋をきょろきょろしていると
「あれ？なんだあの箱？」
さっきは気ずかなかったけど他の武器の陰に隠れるようにしてポツンと少し大きめの箱が置いてあった。
「カトレアさんあの箱はなんですか？」
「ああ、あれは武器開発をしている時に試作品として作ったのですが出来がよくないからという理由で駄目になったものを入れているものですね」
試作品か。一体どんなんだろう？とりあえず箱を開けてみる。そこで俺は思わず自分の目を疑った。
「こ、これはまさか！！！」
そこにあったのは叩くと可愛い音のする真っ赤な格好をしたあいつだった。そうそれは
「ピコピコハンマーーーー！！」
ってなんでだよ！！！！！なぜピコピコハンマーがここに！やる気あるのか武器開発者！
「そのハンマーは叩いてもやわらかいためあまり攻撃の威力がなくて叩く時にピコッという音がするだけの失敗作ですわ」
まぁ魔王相手にピコピコハンマーは確かにないよなぁ。むしろ魔王に馬鹿にしているのかと思われて怒りをかいそうだし。これは無理があるか・・
そう思っていたがここで俺はふとある名案を思いついた。

「そうか。そうだ！この手があったか！！」
これならば平和的解決ができるかもしれない。うん、いける！！俺は決心した。
「カトレアさん俺この武器にします！この武器で魔王を倒して見せます！！」
「え！こ、これでよろしいのですか？ですがこれは失敗作ですよ？」
「大丈夫です俺に任せてください！絶対に大丈夫ですから！だからおねがいします！！」
俺がそう言うとカトレアさんは少し何か考えはじめた。
頼む、頼むから龍殺しとか１０ｔとかはやめてくれーーーー。
そんな俺の願いが届いたのかカトレアさんはしばらく考え込んだ後
「わかりました。勇者様がそこまでおっしゃるのならお任せいたしますわ」
よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁl！！！！
「ありがとうございます！！」
こうして俺は魔王討伐のためにピコピコハンマーを装備していくことになった。
うん、まぁなんとかなるだろう。・・・・・たぶん。

魔王城って意外と分かりやすい（前書き）

魔王ってどうやって生まれるんですかね？というどうでもいい疑問が浮かびました。本当にどうでもいいですね。
相変らずグダグダですがよろしくお願いします。

魔王城って意外と分かりやすい

「それでは勇者様とりあえず武器も決まったわけですしさっそく魔王討伐に向かっていただけますか？」
「え！？もうですか！！っていうかちょっと待って、その魔王っていうのはなんなの？なんでそんなことになってるの？」
「それは・・話せば長くなるのですが・・・」
カトレアさんが急に真面目な顔になりなにやら深刻そうなオーラをだしている。
「じつは、ここ最近魔族による事件や暴動が頻繁に行われるようになって近隣の国や村が大きな被害をこうむっているのです。中にはもうすでに壊滅状態にまで追い込まれている場所もあるようでもはやこれは見過ごすわけにはいかないということでわが国は魔王討伐のために動き出したのです」
「壊滅状態って・・そんなひどいことになってるのかよ」
確かにそれは見過ごせないよな。
「ん？でも、ここ最近ってことは前まではそんなことなかったってこと？」
「はい。数年前まではこういった大きな事件や被害も無かったのですが急に魔族の活動が活発になってきて今ではこの有様です」
急に活発にか・・どうしてだろう？何か理由があるはずなのだろうけど。
「うーん、さっぱりわからん」
「とにかく今この現状をどうにかしなければいずれわが国も何らかの被害をこうむる筈。そうなる前に元凶をどうにかしなければいけないのです！！」
「な、なるほど現状はわかった。けれどもさ俺に魔王討伐とかは無理だと思うんだよね。ほら俺、体格も平凡だし力もそんなに無いしさ」

なんか自分で言ってて虚しくなってきた。
「いいえ、あなたは選ばれし者。必ずやこの世界を救ってください
ます！！」
うお！まぶしい！！そんなキラキラした顔で俺を見ないでくれ。
「うう・・あ、でもその魔王っていうのはどこにいるの？俺あんま
り体力も無いから遠い場所だと辿りつけないかも」
「それなら心配後無用です。ほらあれをご覧ください」
カトレアさんはそう言って大きな窓の方を指差した。その方向を見
ると
「え・・何あれ」
そこには立派な建物があった。しかしその建物の見た目はどこか不
気味で所々からとげのような物が飛び出している。いかにも近ずい
ては駄目ですよ感が滲み出ていた。
「あれが魔王が住んでいるという魔王城です」
「・・・ってか待って、何か近くないですかあの城」
俺の気のせいか何だかすぐそこに城が建っているような気がするん
ですけど。
「ええ、ここから歩いて15分位ですかね」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
へ？
え？ちょっ・・15・・ま、何・・へ？
「15分んんんんんんんんんんんんんんんんん！！！！！」
「はい」
畜生おおおおおおおお！！魔王どこに城建ててるんだよ！！もっ
と考えろよ！！もっといい場所あるだろう！！もっと断崖絶壁の孤
島とかさ！火山が噴火してるような危険地帯とかさ！！
「えーとほ、本当に行かなきゃ駄目？」
「はい」
だめだ。俺の人生終わった・・
「勇者様大丈夫ですか？」

「あ～～～～～・・」
ははは・・こんなわけの分からないような場所で死ぬなんて思いもしなかったよ。
「とにかく善は急げです。勇者様行きますよ！！」
「あ～～～～～～・・え？」
カトレアさんが俺の手を握っていた。あれ？何かこの光景すっごいデジャブなんですけど。
「カトレアさんちょっと待っあああああああああああああああああ！！！」
俺が静止する前にカトレアさんは走りだした。
「もういやだあああああああああ！！」
しばらくして・・・・・
「さぁ、勇者様着きましたよ」
「うおえええええき、気持ち悪い・・」
ふらふらになりながらも何とか意識を保ちつつ正面に聳え立つ魔王城を見上げた。近くで見て俺はさらに絶望した。
「嘘だろ・・」
でかい、でかすぎる。こんな建物今まで見たこと無いぞ。っていうか何だか城の中から変な声？なのか何なのかは分からないが不気味な音が響いていた。
「それでは勇者様、私はここまでしか近ずくことができません。ここから先は勇者様一人で行っていただくことになります」
「え！？ちょ、ちょっと待って！！俺一人で行くの！？もっと仲間の人とかいないの！？」
「それが、今わが国の兵士たちは壊滅状態になってしまった国や村の救援作業のために出払ってしまっているのです」
「だ、だったらその人たちが帰ってきてからでもいいんじゃないの？そのほうが魔王討伐に成功する確率も上がるんじゃないの？」
嫌だ、一人は絶対に嫌だ！！
「ですが勇者様彼らが帰ってくるのは当分先の話になってしまうの

です。それにわが城の調査隊の調べによると今魔王城の魔力が急激に弱まっているとのことなのです。ですからチャンスは今しかないのです！！」
もお何で魔王城そんなにタイミングいいんだよ！！誰かの陰謀か？陰謀なのか！？
「勇者様、お願いします！！あなたしかいないのです！！」
カトレアさんが半泣きになりながら俺に頭を下げてひたすらお願いしてきた。
「う、うううう～～～」
女の子が半泣き状態になりながらこんなに必死にお願いしているのにウジウジしている自分がとても情けなかった。
ここで断ったら本当の意味でヘタレで最低な男になってしまう。だけどこんな場所に一人は嫌だ。
「うううううううううううううう・・・・・・・ああああああ！！！！」
ここまできたらもうしょうがない！！男をみせろ俺！！
「わかった！！わかったよ！こうなったらもうやけだ！！魔王でも何でもかかってこい！！」
「ゆ、勇者様！！」
カトレアさんの表情がパーッと明るくなった。
俺は一度決めた決心がまたぶれる前に魔王城の正面扉に向かって歩き出した。
「じゃあ、行ってきます！！」
カトレアさんに大きな声でそう告げた後、俺は勢いよく扉を開け放った。
中に入ってみるとなんともいえないひんやりとした空気と沈むような重い空気が漂っていた。
「・・・・・・・・・・」
どうしよう、もう逃げ出したい。
とりあえず、少しずつ奥え奥えと進んでいく。進んでいくたびに先

ほどよりも淀んだ空気と時々聞こえる何かの鳴き声に俺のメンタルポイントはゴリゴリ削られていった。
しばらくして一つの部屋にたどり着いた。部屋の扉には死神を彷彿とさせるようなデザインの装飾が施されていた。
「開けたくねぇ・・開けたくねぇよ～・・」
泣き出しそうになりながらも恐る恐る扉に手をかける。その時
「あの～私の部屋に何か御用ですか？」
「うびゃあああああああああああああ！！」
突然後ろから声をかけられた。俺は叫び声を上げながら慌てて後ろを振り返った。
すると、そこにいたのは・・・・

異種族ってなんかいいよね（前書き）

グダグダですがよろしくです。（泣）

異種族ってなんかいいよね

そこにいたのは目のやりばに困ってしまうくらいナイスボディをしたお姉さんだった。肌の色は茶色くこれは褐色肌というんだろうか？瞳の色は綺麗な赤色で、髪の色はピンク色に染まっていて何だか少し色っぽい感じがした。
しかし、そんなことよりもまず俺の目に付いたのは彼女の背中に生えている
「は、羽？」
しかも、ただの羽ではない。何かの映画で見たことあるような立派な悪魔の羽が生えていた。
それを見た瞬間俺は悟った。この人は人間じゃない！！俺の中の危険を知らせるアラームが大音量で鳴り響いてる！！
「す、すいませんでしたあああああああ！！」
とりあえず土下座した。
「ど、どうしたんですか！？大丈夫ですか？」
彼女が俺に手を伸ばそうとした
「ひいいいいいい！？お、お願いです殺さないでえええええ！！」
「ええ！？」
俺はひたすら土下座した。嫌だ！こんなところで死にたくねぇ！！
「ちょ、ちょっと大丈夫ですよ。そんなことしませんって」
彼女が慌てたような声で俺にそう言ってきた。
「ほ、本当に？」
「本当ですよ！！だから落ち着いてください」
彼女は軽く微笑みながら優しい声で俺をなだめようとした。
少しして
「落ち着きました？」
「は、はい」
あの後、俺は彼女に部屋に案内されてなぜかお茶をご馳走になって

いた。
しかし、この部屋あのおぞましい扉の見た目とは裏腹に中に入るととても可愛らしいまさに女の子って感じの部屋だった。アンバランスすぎるだろ・・・
「あの～ところであなたは？」
「は、はい！私怪しいものではありません！」
「？」
「お、俺の名前は佐藤勇治っていいます」
「佐藤勇治さんというのですね。私はテスタ・スキンスといいます。種族はサキュバスです」
彼女はにっこり笑いながら自己紹介をしてくれた。
「サキュバス？」
何かで聞いたことがある。確かサキュバスって男性の精気とかを吸い取るとか何とかっていう悪魔？だったっけ？
「はい。あ、でも心配しないでください。私は人間を無理矢理襲ったりしませんから」
「は、はぁ・・・」
それを聞いて少しは安心したがそれでも油断はできない。なんたってここは魔王城の中なのだから。
何が起こるかは分からない。
「そ、その羽もサキュバスのものなんですか？」
俺はずっと気になっていたことを聞いてみた。
「ええ、そうですよ。あ、少し怖いですよね。ちょっと待ってください」
そう言って彼女は何かつぶやいた。すると次の瞬間、羽が徐々にテスタさんの背中えと消えていった。
「す、すげぇ・・・」
その光景に思わず見入ってしまう。一体どうなってるんだろう？
しばらくするとテスタさんの羽は完全に消えてしまった。
「これならもう怖くないですよね？」

「あ、あはははは・・・」
俺は苦笑いしかできなかった。
「ところで、佐藤さんは人間ですよね？こんなところに何か御用でもあったんですか？」
「え、いやその・・・」
言えない。魔王を退治しに来ましたなんて言えない。絶対やばいことになる。
「ちょ、ちょっと立ち寄ってみたというか面白そうだったから入ってみたというか・・」
「そうなんですか？」
「ま、まぁ・・あはは」
「うーんでもここあんまり面白いものなんてありませんよ。ここよりも城下町の市場のほうが全然面白いですよ」
「へ、へぇー。そ、そうですか」
「なんなら今からご案内しましょうか？」
「い、いやそれはまた今度でいいかな・・」
「そうですか・・」
テスタさんは少し残念そうにしていた。案内してくれようとするなんて案外いい人？なのかもな。
「それじゃあ、このお城の中を案内しましょうか？」
「あ、あの」
「はい？」
俺は勇気をだして言ってみることにした。
「案内もいいんですが俺実は魔王様に少し用があって・・・」
「・・・・え！？魔王さまに！？」
あれ？テスタさん？何で驚いてるの？
「魔王様に用っていったいどんな？」
テスタさんが少し険しい顔で聞いてきた。やっぱりやばかったのかも。
どうしよう・・・嫌な予感がしてきた。

「あ、いやそのどんな人なのかなぁーと思って。少しお話でもできたらなぁーと・・・」
「魔王様と！？」
テスタさん何でそんなに大声出すの！？やばい、怒ってるのかも・・・
「で、でも俺みたいなのが魔王様と話したいなんて図々しいですよね。いや、ホントすいませんでしたあああ！！」
本日二度目の土下座。
「魔王様と人間がお話？・・・まさか佐藤さん」
え？なにこの空気。俺まずいこと言ったのかも・・・
「佐藤さん・・・」
「ひゃ、ひゃい」
呼ばれて顔を上げると・・・あれ？テスタさんなんでまた羽が戻ってるの？何そのゴゴゴゴゴ・・・っていうオーラ！？
「人間が魔王様と・・人間が魔王様と・・まさか・・まさか・・」
「ひいいいいい！！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」
俺はひたすら謝った。もしかして俺がしようとしていることがばれたのか！？
ふいにテスタさんが俺の肩をガシッと掴んだ。かなり力強く掴まれ無理矢理立たされた。
「うわあああああ！」
「佐藤さん！ぜひ魔王様とお話してあげてください！」
「やだーー！！こんなところで死にた・・・・」
・・・・・・・・・・・・へ？
「い、今なんて？」
「ですから、ぜひ魔王様とお話してあげてください！！きっと喜びますよ！！」
な、なんだこの展開。何で俺と話して魔王が喜ぶんだ？
「あの・・」
「そういうことなら早く言ってくれればよかったのに！それじゃあすぐに行きましょう」

「ど、どこに？」
「決まってるじゃないですか、魔王様のお部屋にですよ！」
「え！？いきなりですか！！で、でもまだ心の準備が・・・」
「さぁ、行きますよ」
そう言ってテスタさんは俺の手をギュッと握る。そして大きな羽を勢いよく広げると・・
「あれ？なんかこれ嫌なよか・・・」
俺の予感は的中した。テスタさんが羽をはばたかせいきなり空中に浮かびだした。当然俺も手を握られているので空中に浮かぶことになった。
「ちょっ！？うわあああああああああああ！！」
「しっかり掴まっててくださいね！！」
部屋の扉を思い切り開け放って部屋の外に出るとそのまま低空飛行をして長い廊下を進んでいく。
「なあああああああああああ！！たーーーすーーーけーーーてーーーー！！」
「大丈夫ですよ、すぐに着きますから」
テスタさんはそんな俺を見ながらクスクス笑っている。
しばらく進むと今度は螺旋階段のある場所に出た。かなり上まで続いているようで見上げてみても階段の終わりが見えなかった。
「さぁこの先に魔王様のお部屋がありますよ」
「え！？こ、これを上るんですか・・・」
絶対に無理なんですけど・・
「大丈夫ですよ、私が連れて行ってあげますから！」
「え、連れて行くってまさか・・・」
「はい♪」
ガシッと手を握られる。そして・・
「じゃあ、行きますよ！くれぐれも落ちないでくださいね？」
「ですよねーーーーーー！！！あああああああああああああああああああああああ！！」

俺の体は大きく宙に舞いそのまま螺旋階段の中を飛びぬけていく。
「もう嫌だあああああああああああああ！！！」
「もう少しですよ、頑張ってください」
俺、魔王の部屋についたら結婚するんだ・・・そう胸に誓った。

そして魔王とご対面（前書き）

久々に更新です。よろしくお願いします。

そして魔王とご対面

「さぁ、つきましたよ」
テスタさんと空を飛ぶこと数分。何とか魔王の部屋とやらについた。
「や、やっとですか・・おえっぷ」
き、気持ち悪い・・・・もういやだ、心が折れそうだよ。
「さぁ、行きますよ佐藤さん」
そう言ってテスタさんが俺の手を掴んできた。
「は、はい・・うぷっ」
何とか立ち上がりあたりを見回してみた。目の前にはとてつもなく大きな扉があり取っ手の部分だけでも軽く俺の頭を超えるくらいの大きさだ。
「こ、この扉開くんですか？」
「ええ、もちろん」
テスタさんは扉に近づくと両手で扉を押し始めた。
「よいしょっ・・と！！」
すると扉がギギギギギ・・と鈍い音をたてながら徐々に開き始めた。
「す、すげぇー・・・」
俺は呆然としながらその光景をみていた。しばらくしてテスタさんが完全に扉を開ききった。
「ふぅ・・・・さてと、魔王様ーーー！いらっしゃいますかーーー？」
部屋の中に入りながらテスタさんが大きな声で魔王のことを呼んでいた。
俺もその後に続くように部屋の中に入ってみたがとにかく広い。床には真紅色の絨毯が敷き詰められている。天井にもバカみたいにでかいシャンデリアやら綺麗なステンドガラスやらとにかく豪華そうなものが敷き詰められている。さすが魔王の部屋って感じだな。
「魔王様ー！テスタですよー！出てきてくださーい」

俺が部屋の中をキョロキョロしている間もテスタさんはひたすら魔王のことを呼び続けていた。
「テスタさん魔王様いないいんですか？」
「いや、この時間ならお部屋にいるはずなんですけど。おかしいなぁ」
二人してあたりを見回してみる。正直俺は魔王に会わなくていいのならそれのほうがいいんだけど。
そんなこと思っていたときふとあるものが目についた。部屋の奥のほうに大きな椅子があったのだ。なんとも厳かなオーラを放っているのでただの椅子ではないだろう。
「うわぁー・・なんか雰囲気あるなー」
「ああ、それは魔王様がいつも座っている椅子ですよ」
やっぱりな。そんな感じがひしひしと伝わってくるもんな。
俺は椅子に近づいてみた。見れば見るほどでかいし立派だ。こんな椅子に座ってる魔王と今から会おうとしているのだと思うと俺は嫌な予感しかしなかった。
そんなときだった。
「ん？なんだ？」
椅子の裏のほうで何かが動いた気がした。俺は気になって椅子の裏側に回ってみた。しかし何もいない。気のせいだったか？
「魔王様！！そこにいたんですね」
すると今度は椅子の向こう側でテスタさんがそう言っていた。
「え！？魔王いたんですか！？」
椅子の裏側から恐る恐る顔をだしてみると
「て、テスタさんあのお方はだだだだだ、誰ですか？」
「魔王様落ち着いてください。大丈夫ですよ彼はあなたに会いに来てくれたんですから」
「わ、私に！？あ、あああああの方は人間の方なのですよね？」
「ええ、そうですよ。よかったですね魔王様！！」
そこにいたのはテスタさんの背中に隠れるようにしてこちらを見て

いるとてつもなく綺麗な女の人だった。
「・・・・・・・・・・・」
「あ、佐藤さんご紹介しますね。こちらのお方がこの城の主であり魔族の王である魔王様です」
・・・・・・・・・・・・・・・へ？
「この人が魔王様？こんなに綺麗な人が？」
「魔王様！お綺麗ですってよ！！」
「や、やだテスタさんきっとお世辞で言ってくれてるのですわ」
顔を赤くしてもじもじしている自称魔王を見て俺は思った。
これ・・・・これは・・・・・・俺の知ってる魔王違う！！これが魔王！？
「えええええええええええええええええええええええええええ！！！！！！」
俺はとりあえず叫んでおくことにした。いろんな意味を込めて。

ヒロインよりも敵のボスキャラの方が可愛いことってあるよね（前書き）

久々の更新です。何とかやっていきます。

ヒロインよりも敵のボスキャラの方が可愛いことってあるよね

えーと・・・なんだこの状況は。なんで俺は魔王と向き合ってテーブルに座ってるんだ。
しかも、目の前には料理が並べられていてチキンやらビーフやら他にも色々ととにかく豪華そうなものが美味しそうな匂いを放っていた。
「さぁ、遠慮なさらずにどんどん食べてくださいね。あ、お口に合えばですけど・・・・」
相変らず魔王は顔を赤くしてもじもじしている。
「あ、ありがとうございます」
とはいってもどうしようか・・・とりあえず食べてみるか？でも魔王から出された食事って怪しいよなー・・・
もしかしたら、毒とか入ってるかもしれないし。
そんな考えがあったせいで俺はなかなか料理に手がだせなかった。
そんな時ふと向かい側から視線を感じた。その方向を見ると魔王が俺のことをじっと見つめていた。
一瞬視線が合う。それに気ずいた魔王はすぐに視線をそらしてしまった。
そして、より顔を赤くしまたもじもじしだした。
か、可愛い・・・・はっ！いやいやいやいやよく考えろ自分。相手は魔王だぞ。
そうだよ、俺はここに魔王討伐にきたんだぞ。こんな料理なんてご馳走してもらっている場合じゃない。
「あ、あの！」
「ひゃ、ひゃい！」
突然俺が話しかけたからびっくりしたのか魔王は椅子から少し飛び跳ねるようにして返事をした。
・・・・本当に魔王なんだよなこの人。

「せっかく料理とかふるまってくれて嬉しいんですけど、俺ここには目的があって来たんです」
「も、目的ですか？」
「はい、そしてその目的とは・・・」
「目的とは？」
俺は深呼吸して心を落ち着けた。
「魔王！　あなたをここで倒すことです！！」
「え・・・・」
言った。言ってしまった。でも俺にはこの人？相手なら何とかなるんじゃないかという希望があったからこそ言えたのだ。
「私を倒すためにここに？」
「そ、そうです」
魔王は少しの間ポカーンとしていた。今のこの状況がよく理解できていないようだった。
ていうかあれ？何だこの空気。俺的にはもうちょっと何かリアクションが欲しかったのだが・・・
「じゃ、じゃあ私に会いに来たというのは・・・」
「そういうことです」
すると、魔王は少し泣きそうな顔になりワナワナと震えだした。
「わ、わわわわわわわわわわ私、私・・・ごめんなさーーーーーい！！」
「えええええええええええええええええ！！」
魔王が謝っちゃった！？
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！お願いだから許してください！！　痛いのは嫌ですーーーーー！」
ひたすら俺に頭を下げる魔王。
「いや、あの落ち着いてください。大丈夫ですよ。倒すとは言ったものの俺も争う気はありませんから」
それを聞いた瞬間魔王は軽く泣きじゃくりながらも頭を下げるのをやめた。

「ほ、ほんとうですか？」
「ええ、俺は争いは好まないタイプなんで」
それを聞いて少し安心したのか魔王の表情が若干和らいだように見えた。
「とは言ったものの、俺はあなたを倒さなきゃいけない。そこで・・・」
「そ、そこで？」
「ちょっとゲームをします」
「げ、ゲーム？」
魔王は頭の上から？マークをだしていた。
「そうです。そしてそのゲームとは・・・・」
俺はお城の武器庫で武器を選んだ時に考えていた作戦を実行することにした。

いざ、勝負です（前書き）

究極にグダグダです（泣）

いざ、勝負です

魔王と向かい合って座り目の前に城から持ってきたピコピコハンマーとたまたま見つけたヘルメットのような形をした防具をだした。
「あの、これは一体」
「これを使って今から勝負するんですよ」
「ええ!?しょ、勝負ですか?」
勝負という言葉を聴いて表情を不安げに曇らせる魔王。うーん・・・この人本当に魔王なんだよな?
「と言ってもルールは簡単だし、危ないことは何も無いから安心してください」
「は、はぁ・・・」
「よし!んじゃまずはルール説明からしますね。えーと最初にじゃんけんをして・・・」
「じゃんけん?」
魔王の頭に?マークが浮かぶ。
「あれ?じゃんけん知りませんか?」
「は、はい」
なんてこった、そこから説明しなければならないのか。自分からやるぞと言っておいてなんだがめんどくせぇ・・・
「じゃ、じゃあとりあえずそこから説明しましょうか」

~30分後~
一通り今からやろうとしている勝負についての説明を終えた。
「そ、そんな難しいルールの勝負私にできるでしょうか?」
「大丈夫、大丈夫。慣れれば簡単だよ」
俺たちがこれからやろうとしているゲーム。
ピコピコハンマーにヘルメット(のような防具)があるならばやる勝負は一つ。

「それじゃあ、始めますか！叩いてかぶってじゃんけんぽん！」
そう。これしかないでしょう！
いやまさか魔王とこれをすることになるとは思わなかったけどな・・・
・
まぁ、しかし俺はこのゲームが大得意である。これなら魔王にも負けないだろう。
「そして、魔王様。最後にもう一つルールを決めます」
「は、はい」
俺はニヤッと笑って
「もし、この勝負に負けたら負けた相手は勝った相手の言うことをなんでも一つ聞くこと！」
「言うことをなんでも一つ聞くですか」
「はい。いいですね？」
「わ、わかりました」
ふっふっふっ・・・魔王よいいのかいわかりましたなんて言って。
後で後悔してもしらないんだからね！
「じゃあ、やりますか！」
「あの、なんでそんなに興奮してるんですか？」
「してないですよ！全然してませんようん！」
とりあえず勝負だ！
「では、1回戦目じゃんけん・・ぽん！」
くっ・・・俺の負けか。しかし俺はすぐに頭を守ろうとヘルメット型の防具を・・・・
ピコッ！
「って、え？」
「や、やった！私の勝ちですね」
うそ・・だろ・・まったく見えなかったぞ。俺は瞬時に頭を守ろうとしたはずなのに・・魔王はいつの間にかピコピコハンマーを握っていてそして俺の頭めがけてなんとも適度な力加減で瞬時に叩きつけてきていたのだ。一瞬背中に嫌な汗がつたった。

「くっ・・・や、やるじゃないか。けどまだ一回戦目。まだまだこれからだ！」
2回戦目
俺×　魔王◯
3回戦目
俺×　魔王◯
4回戦目
俺×　魔王◯
5回戦目
俺×　魔王◯
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「お願いします！！もう一回だけ！これで最後！！」
「わ、わかりました」
俺は自分が持つ限りの集中力と瞬発力をその一戦につぎこんだ。
「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

結果は・・・・惨敗でした。
「ちくしょおおおおおおおおおおおおお」
強すぎだろ！これなんて無理ゲーだよ！なんでだよ！魔王だからか？魔王だからなのか！？
「あ、あの・・・」
「・・・・・はい」
もうだめだ。俺はこの後どうなるのだろうか？いくら気が弱くてとても魔王に見えないようなこの魔王でも自分を倒しにきた奴を放っておくわけが無いだろう。
「わ、私勝っちゃいましたけど・・」
「・・・・はい」
「なんでも一つ言うことをかなえてくれるんですよね？」
「・・・・・・はい（泣）」
もうどうとでもしてくれ・・・

「じゃ、じゃあ・・・・」
ゴクリ・・と生唾を飲み込む。グッバイ俺の人生。
魔王は大きく息を吸い込みそして
「わ、私とお友達になってください！！お願いします！」
・・・・・・・・・・・・・・・ん？
俺はついに耳までいかれてしまったのか？何だかものすごくピュアなお願いが聞こえてきた気がする。
「ん～と？今なんて？」
「あ、えと、その、で、ですから私とお、お友達になって欲しいんです」
・・・・うん、ごめん。もうさ俺この人、いやこのお方のこと魔王として見れないわ。
だって、だってさ・・・・・・可愛すぎるでしょおおおおおおおおおおお！！
「ほ、本当にそれだけでいいんですか？」
「い、嫌だったでしょうか？」
「滅相も無い！！むしろよろしくお願いします！！」
俺は深々と頭を下げた。
えーと、というわけで俺魔王とお友達になりました。
てへっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2699x/

こんな魔王と勇者ってどうですか？

2012年1月14日00時59分発行